

受け継がれる帝国の記憶

——大連近代都市空間の成立とその変遷——

劉 建輝

国際日本文化研究センター

はじめに

阿片戦争後、列強の度重なる侵攻により、中国の都市、とりわけ沿岸部の都市は、既存の伝統的な形態のほかに、さらに二つの新しい類型が生まれた。一つは、在来の都市（県城等）の城外（郊外）にいわゆる租借地が設けられ、その発展とともに新旧両市街が拮抗しながら融合していくタイプで、たとえば上海や天津、また瀋陽などがその例として挙げられる。いま一つは、元々はあくまで一村落にすぎないが、そこにたまたま新たに駅や港が構築されたことによってにわかに出現した都市で、たとえば青島や大連、ハルピンなどがつまりこの類型に入る。そして、もし前者の都市で展開されたのは一種の異文化ないしは異文明の衝突と融合のドラマであるとすれば、後者の空間で演出されたのはまさしく列強、すなわち各帝国の一方的な文化権力とその欲望のショーであると認めることができる。その意味で、両者は同じ植民地都市と称しながらも、その性格がきわめて異なっており、またそれぞれの中国近代史において果たしてきた役割も大いに分かれていると言えよう。

本稿では、そうした後者の都市の中でももっとも典型的な存在である大連を取り上げ、その都市空間の成立と変遷のプロセスをたどることによって、いわゆる西洋の都市文明ないしは都市文化がいかに中国に移植され、またその移植の「記憶」がいかに後の支配者によって継承されていったかという中国近代都市の一類型のありかたについていささか明らかにしてみたい。

I 部落「青泥窪」時代の大連

遼東半島の南端に位置する大連地域が初めて中国の史書に登場するのは、どうやら遠い戦国時代に遡るが、いわゆる中央権力が浸透し、確実にこの地方で統制を敷くのはおよそ明の初期と言われている。明の遼東統治は、遼陽都指揮使司の下に中、左、右、前、後の五衛と東寧衛、自在州を遼陽に置き、また遼東半島には海州衛、蓋州衛、復州衛、金州衛を設け、その金州衛に旅順口や大連湾の守備を当たらせた。そしてこの時期に金州城を修築したのみならず、倭寇の来襲に備えるためにまだ青泥島と言われた大連に防御の城堡鐵台を構築した記録も確認されている。

その青泥島が清代に入って、青泥窪と呼ばれるようになり、長い間歴史の表舞台から消えていたが、第二次阿片戦争の時、なぜかイギリス軍の上陸地点に選ばれ、その2万人にも及ぶ英軍の駐屯によって、一躍注目される場所となった。そしてこの英軍の駐屯をきっかけに、大連の地理学的な重要性がようやく中国側にも気付かれ、以後いわゆる洋務運動の中で、李鴻章らによって旅順の軍港建設とともに、大連湾の各地において多くの砲台建造が急速に行われたの

である。

従来、大連の前史を語る際に、よくそれを一辺鄙な「寒村」として扱ってきた。しかし、前記のように、少なくとも19世紀後半の段階では、それはすでに近くに旅順という大きな新興の軍港を持ち、また周囲には多くの西洋式の新築砲台が点在する大きな「村落」となっていた。むろん明確な人口統計こそ存在しないが、およそ60近くの部落に1000戸を下らない住民が半農半漁の生活を営んでいたと言われている。そして、これらの部落は明らかに当時の政治的、軍事的統治機構の金州地方政府に隷属し、その行政的管轄下に置かれていた。その意味で、後のロシア治下において金州が逆に大連に従属させられ、その一行政区となったのは、まさに「異文明」の侵攻による地政学的な「転倒」を象徴する典型的な事例と言えよう。

II ロシア帝国租借地としてのダリーニー

1897年11月15日、ドイツは二名のドイツ人宣教師が山東省で殺されたことを理由に山東半島の膠州湾を占領した。この突然の事態を受けて、清政府は1896年9月に結ばれた「露清密約」に従い、急遽ロシアにドイツ撤兵の斡旋を依頼した。そしてロシアはこうした中国側の依頼を大義名分に、膠州湾のドイツ軍に圧力をかけるためだと称して、かつて幾度も入手しようとしてついに実現できなかった極東の不凍港である旅順と大連に、同じ年の12月19日にシベリア艦隊を派遣し、現地への駐留を実現した。

その後、ロシアはこうした駐留の「実績」を踏まえて、まず1898年3月清朝政府に旅順と大連の租借を内容とする「旅大租地条約」（「パブロフ条約」）を結ばせ、また同年4月と7月にそれぞれ租借地の拡大を内容する「続訂旅大租地条約」と東清鉄道南滿州支線の修築を内容とする「東省鉄道公司続訂合同」を押し付けた。この一連の条約の締結によって、大連一円はほぼ完全にロシアの支配下に入ってしまった。

旅大租借地を入手した当初、ロシアは、まず旅順に最初の殖民政権——軍政部を設置したが、その後1898年8月に正式に州としての行政を与え、租借地行政庁を成立させた。そして一年後の1899年8月に皇帝ニコライ二世の名義で「暫行関東州統治規則」を頒布し、租借地を一方的に「関東州」と改名して、関東州庁をアムール総督の管轄下に置いた。同時にニコライ二世はまた勅命を出して、大連湾にロシア語で「遠方」を意味する都市ダリーニーを建設し、それを自由貿易港とすることを内外に宣言した。ロシアが既存の軍港である旅順と並んで大連に自由貿易権のある商港を建造しようとしたのは、一つは膠州湾を占領したドイツの青島経営に対抗するためであり、もう一つは当時中国北方最大の港である營口港をなんとしても牽制したいという事情があったように思われる。そしてこの帝国の権益と威光にかかわる二つの要素は、後にいわゆる大連経営のありかた、ひいてはその都市形態の形成にまで実に大きな影響をもたらしたのである。

「暫行関東州統治規則」に基づき、州内の行政区域は大きく旅順、大連、貔子窩、金州の四つの都市とその他の五つの行政区に分けられた。その中で大連の行政管轄区域としては市街区、老虎灘区、沙河口区の3区が設けられ、市街区以外の2区が郊外区と定められた。これにより行政上の区分がひとまず成立したわけであるが、ただこの時点において、大連の市政はまだ本

格的に始動する段階には至っていなかった。というのも、勅命の頒布で大連が一新興都市として現実的に誕生はしたものの、その後の3年近くの間、市役所はもちろん、市長さえ存在しなかったからである。そのため、初期の大連市政は実質上ほぼ東清鉄道会社によって運営されていたのみならず、商港都市としての基盤をなす港湾建設や都市計画などもことごとくこの鉄道会社に一任されたのである。そのあり方は、たとえば日露戦後における日本の「満州経営」が一時ほとんど満鉄に委ねられた状況ときわめて類似しており、こうしたところからもいわゆる両「国策」会社をつなぐ一種の帝國的「記憶」のようなものが認められよう。

一大自由貿易港を目標とする大連の建設を任せられた東清鉄道会社がその全事業の責任者として時の同会社の技師長、かつてウラジオストクのエグリセリド埠頭築造の経験を持つサハロフを任命した。その彼はペテルブルクで約半年間の準備を経て、1899年春、ロシア帝国の威信を賭ける壮大な建設プランを携え大連に赴任した。そしてその後、1902年5月の勅令により大連の特別市制が実施されたのを受けて、そのまま市長に昇進し、日露戦中の大連陥落まで約3年もの間その地位に座り続けていた。

サハロフを中心に作成された大連港築港と市区建設の総合都市計画は、1899年からの4年間で、総投資額が約1400万ルーブルを予定する第一期事業と、第一期事業の規模を4倍に拡大し、追加投資も3000万ルーブルを要する第二期事業からなる二段階のものだったが、偶然にも第一期工事がほぼ完了したところで日露戦争が勃発し、サハロフらの大建設計画はついに途中で頓挫してしまったのである。

市区建設に限って言うと、第一期工事では、まず市街と付属設備用地として東西両青泥窪とその他25村落の土地54000余畝（3300ha）と家屋を45万ルーブルも投じて強引に買収し、整備した。そして、かの有名なG. E. オスマンによる改造後のパリ市街に模範を取り、中心部からの貧民（中国人）の排除、大街路や公園、広場などによる近代的都市空間の演出を実現するために、市街全体を欧羅巴市街、中国市街、行政市街の三区域に分割し、都市機能の分離と住民の「すみわけ」を実施した。

三つの市街の中で、中心的な位置を占めたのは、もちろん欧羅巴市街だが、その当初の規模は、南山北麓から商港までのおよそ4平方キロで、北は鉄道を隔てて行政市街と隣接し、西はもと青泥窪村の所在地に新設された西公園（後の中央公園）を境とした。市街内では、多数の道路が整備され、その総延長は約47000メートルにも達したと言われている。

中国市街は、西公園のさらに西の方に広く展開されているが、第一期工事では、西公園付近（後の伏見台）の地区画定はほぼ完了したものの、その全体の街区設計についてはまだ完全に確定されていなかったようである。

上記の二市街に比べて、行政市街は、面積が約0.45平方キロとやや小さく、西、北は海に臨み、東は工場と貨物停車場に隣接し、南は鉄道線を隔てて欧羅巴市街と相対している。この地区は売却や貸与に利用せず、もっぱら市庁機関、東清鉄道関係者の住宅や宿舍建築用地にだけ充てたので、市役所（後の資源館）や市長官舎（後の満州館）、東清鉄道汽船会社（後の大連倶楽部）など、後のいわゆる露西亞町の主な建築物が、この時期すでに次々と完成していた。

パリにモデルを求めた大連市街、とりわけ欧羅巴市街の最大の特徴は、市街内に数個の大広

場を作り、そこから大通りを四方八方に放射させながら、さらにそれらの大通りを環状道路で連結させることによって、各広場を中心に街路が幾重にも円形を描いているところにあると言える。中でも市街の中心に位置する最大の広場は、直径700フィート（213メートル）もあり、ここから東西南北に10本の幹線道路を放射状に向かわせる一方、その周囲には官庁や寺院、銀行、劇場などさまざまな公共建築をめぐらせることになっていた。時のロシア皇帝ニコライ二世に因んでニコライスカヤ広場と命名されたこの場所は、いわばまさしくロシア帝国の支配を象徴するもっとも「権力」的な都市空間だったのかもしれない。

欧羅巴市街のもう一つの大きな特徴は、町全体における都市機能の分離をさらにその内部で徹底させ、いわゆる商業区、市民区、邸宅区の3区域をそれぞれ市内の地形に応じて設けたことにある。たとえば、商業区は、およそ6500平方メートルを有し、北は鉄道線路、南は後の西通と山縣通を境界としていて、その土地が比較的平坦であるため、主に会社や銀行、商店などの用地に充てることになっていた。また、市民区は、面積が約5500平方メートルで、北は商業区と隣接し、東は後の土佐町と朝日町を境としている。区内の土地にはやや傾斜が多く、地隙も散在するが、役所や銀行、商社等の下級職員および中流以下の一般市民の住宅予定地として使用されることになっていた。そして、邸宅区は、3区域の中でもっとも小さく、およそ4100平方メートルを占めるが、後の土佐町と朝日町を境界に、町の東部にある山麓の傾斜地に位置し、一種の閑雅な空間として、庭園付の広壮邸宅などの建設に利用される予定であった。

一方、第一期工事では、市内街路も大いに整備され、広場を始めに、大街、並木町、街、小路と細かく5種類に分けられ、急ピッチに建設作業が進められていた。その主要なものとして、たとえば、モスクワ大街（後の西通と山縣通）、キエフスキ大街（後の監部通と寺内通）、ザコロドヌイ大街（後の西公園町）、サンクト・ペテルブルグ海岸大街（後の寺児溝から東広場を経て濱町に至る道路）、サムソンスキー並木町（後の長門町と敷島町）の五つの幹線街路を挙げることができるが、この中で、モスクワ大街の幅員は113フィート（34メートル）に達し、その他の大街も85フィート（26メートル）を有している。そして幅85メートルを持つ並木町には、後に大連のシンボルにもなったアカシアが南ロシアから輸入され、何列にも植樹されていた。

街路と同時に公園の整備も短期間に推進された。もっとも規模が大きかったのは西公園（後の中央公園）で、ちょうど中国市街と欧羅巴市街の中間に位置し、ほぼ在来の西青泥窪村跡地全体に等しい広大な面積を占めていた。この公園は、当時市公園と称して、一種の公共性をアピールしたが、実質的には中欧両市街を分離する役割も担っていたと見て間違いないだろう。この西公園に対し、旧東青泥窪村の跡地を整備して建設されたのはいわゆる後の東公園だが、その園内に地隙を利用して二つの大きな貯水池が作られていたため、前者と同様の市公園としての機能を持つ一方、供水という実用的な役割も果たしていたようである。そして、この東西両市公園の他にまた三つの小公園があって、一つは旧中国人墓地を取り壊した跡に位置し、後に松公園になっていた。後の二つはそれぞれ邸宅区内の正教寺院付近と行政市街にあり、後に前者は朝日広場（付近）、後者は北公園となっていた。

なお、第一期事業では、市街以外の郊外の諸施設として、たとえば付家庄付近に陸軍所属の

療養病院や市立療養病院、馬欄河下流の塩田付近に競馬場、老虎灘と棒垂島に海水浴場や別荘などの設置計画も立てられたが、いずれもまだ着工に至らないまま日露戦争を迎えたのである。

このように、いわゆるロシア治下の大連では、まだ不十分ではあるものの、すでに後日に見られるような都市空間の輪郭がほぼ出来上がったと言えよう。これは単に以上の諸用地の区画や道路、公園などの整備だけではなく、たとえば当時すでに完成した主な公共施設の建築物、市役所や市長官舎、東清鉄道汽船会社（以上前出）、男女中学校（内装工事が未完成、後の満鉄本社事務所）、水上警察署（後の東洋ホテル）、東清鉄道病院（後の工業博物館）、露清銀行（後の正金銀行）、欧羅巴市場（後の第一市場）などを見ても、その一端をうかがうことができる。そして、後述するように、この輪郭はいわばロシア帝国の一つの「遺産」として、ほぼそのまま新たな統治者である帝国日本に継承され、その後数十年にもわたって、あたかも一種の「記憶」のように長らく機能し続けていたのであった。

Ⅲ 帝国日本に受け継がれたモダン都市・大連

1904（明治37）年2月、朝鮮半島や「満州」の権益をめぐる日本とロシアの長い外交交渉が決裂し、いわば起こるべくして起こった日露戦争はついに戦端を開いた。そして、開戦してから約四ヶ月後の5月30日に、すでにロシア軍やロシア人市民が旅順に撤退した後の大連をほぼ無血で制圧し、その後の50年にわたる「満州」進出の橋頭堡を獲得した。

大連を占領するやいなや、日本軍がさっそく軍政署を設置し、一時完全に軍政を敷いたが、その後、新設の遼東守備軍司令部の下でまず明治38年の紀元節にあわせて在来ロシア名であるダリーニーを大連に改名し、また同年の6月23日に正式に民政機関である関東州民政署を成立させた。そして9月7日に日露講和条約（ポーツマス条約）が結ばれたのを受けて、日本はいわば始めて「合法的」に関東州の権益を継承し、その経営にも本格的に乗り出した。

中でも、まだ軍政時代の明治38年4月に、当時の軍政署がすでに「大連専管区設定規則」を公布し、ロシア治下の「すみわけ」政策を踏襲する形で市内を軍用地区、日本人居住地区、清国人居住地区に分ける一方、「大連市街家屋建築取締仮規則」の頒布などによって、都市計画の実施を始めたが、明治38年9月からの一般邦人自由渡航開始に伴う日本人人口の急増を受けて、まず段階的に軍用地区を民間に提供し、そしてその一年後の明治39年9月1日に関東都督府官制の成立による大連民政署という完全な民政機関の開庁が実現されると、大連はまさに内地を含む日本の民政治下で唯一の自由港、また国際都市としてその姿を変え始めたのである。

新たな統治形態の下で再出発した大連は、その都市計画の核となる市街建設と港湾建設について、それぞれ関東都督府と設立したばかりの南満州鉄道株式会社が担当した。具体的には、まず明治40年1月に旧ロシア治下の市街計画を基礎として中央公園以东の大連市区計画を決定し、またその翌年の8月に満鉄沙河工口工場東方鉄道線路以南の37万7千5百坪を工場地区に指定した。その後、さらに同年の9月に伏見台の約10万4千坪、明治44年5月に小崗子と李家屯の33万坪、大正2年5月に沙河工口一帯を順次に市区計画に編入し、開拓と整備を重ねたのである。

そして、大正4年9月に関東都督府による「大連及旅順市規則」の制定に基づき、同10月から両市において特別市制を実施し、またその後の大正13年5月の関東州市制の発布により、いわゆる地方自治制度の下で本格的な市制を開始することになるが、この間、まず大正8年6月に、市区計画並地区区分と街路等級を定め、また工場や住宅、商業地区として小崗子、伏見台以西の沙河口、馬欄河に至る地域において、新たに約2百5万坪の市街大拡張計画を立てる一方、これにあわせた形で全計画地域に住宅、混合、工場、商業用地の4種の区分も決定した。なお、その後も大正13年に沙河口会の一部、西山屯会、昭和3年に西山会の一部、老虎灘会、寺兒溝屯などの隣接地を次々と市区計画に編入し、後のいわゆる「大大連」の基礎を早くも作り出したのである。

このような周辺への拡張が進められる一方、在来在市街地については、基本的にロシア統治時代の設計を襲用し、そのさらなる完成を目指した。ただ、新征服者の威光を表すために、町名などは徹底的にそれに相応しいものに変更された。たとえば中心部と大通には出征した陸海將軍や軍衙から命名し、その他の街路には日本国内の国名に因んで名前を付けた。監部通、大山通、西通、山縣通、寺内通、児玉通、乃木通、東郷通、美濃町、飛騨町、伊勢町、信濃町、播磨町、浪速町、長門町、敷島町などがそれである。その後、市街拡張が進むにつれ、新開地にはそれぞれその地の性格に合わせた町名を付けるようになるが、それも内地の「権力」と植民地特有のモダン性を示すものにほかならなかった。たとえば、文化住宅街の南山麓の町名は柳町、桜町、桂町、朝日町と付けられ、海岸沿いのリゾート地や住宅街の町名は向陽台、文化台、光風台、長春台、清明台、鳴鶴台、秀月台、桜花台、青雲台、桃源台、臥龍台、平和台などと命名された。一方、ロシア時代の中国街である北崗子、西崗子を小崗子と改名し、その町名には中国市街に倣って宏濟街、永安街、福德街、平順街などと中国街名をあてたが、その西の工場新開地には真金武町、白金町、黄金町、京町、仲町、巴町、元町、西町とまた日本の町名を付けたのである。

ロシア帝国の「遺産」を受け継ぎ、その「威光」のさらなる発揚を目指す意気込みがかつてロシア治下においてももっとも整備に力を入れていた公園や広場などの大規模な改造と改修にも現れた。たとえば、大正15年に関東庁から移管を受けた旧西公園については、大連市は昭和3年から十ヶ年継続事業で工費30万円を投じて改良に着手し、その後いったんは廃止するが、昭和8年から再度21万円の予算を組んで七ヶ年継続事業として取り組み、園内に花壇や水泳場、相撲場、児童遊園などを次々と新設した。またロシア時代から大連の中心だった大広場の場合は、大正3年まさにその中央に初代関東都督大島義昌大将の銅像を建立し、またそれと前後してその周辺には大連民政署、市役所、ヤマトホテル、朝鮮銀行、通信局、正金銀行などの「権力」を代表する施設を立て続けに完成させ、いわゆる帝國的空間をまざまざと見せ付けたのである。

一方、内地と「対抗」する形で、後に「モダン大連」と呼ばれるゆえんのさまざまな都市の「装置」もこの時期からあいついで完成している。たとえば、明治42年に、満鉄がまず電気遊園を旧中国市街の伏見台に建設し、またその直後に星ヶ浦遊園をおよそ10万坪の土地に数十万円の大金を投じて大々的に造営したのである。

このように、いわゆる日本治下の大連は、周辺への拡張や在来市街の改造、公園や広場の再整備、さらに町名の変更など、実に多くの都市計画事業を施し、その姿を変えてきたが、しかし、すでに見てきたように、その骨格は基本的にやはり帝国ロシアの「遺産」を踏襲し、その「拡大再生産」を行つたに過ぎない。そこには「帝国」という権力形態は、まさに一種の「記憶」として都市空間の中に現れ、両統治者間のこの支配の継承関係がけつして単なる外交条約などではなく、むしろ都市の「身体」の中に深く刻まれていると言えよう。その意味で、この都市空間としての大連モデルはその後満鉄線に沿って北上し、瀋陽や長春の都市形態の形成に多大な影響を与えたことは、きわめて興味深い事象であるが、これらについてはまた稿を改めて論じたいと思う。

【Abstract】

The structure of the central axis had been an important character of many Chinese cities in historical time. The idea of the structure of the central axis was formed and developed during the Sha and the Shang Dynasties. Although the capital Xian Yang in the Qin Dynasty and Chang An in the Western Han Dynasty did not have the central axis structure, the layout of Xian Yang And Chang An had on effect on the formation and perfection of the layout of the capital in <Kao gong Ji>. The arrangement of the "King Palace" at the northern end of the central axis mainly related to the natural environment. The changes in the structure of the central axis in Da Du city in Yuan Dynasty and Beijing city in Ming and Qing dynasties were also influenced by the natural environment. They were the result of creating a better harmony with the nature. The extension and the development of the structure of the central axis in later Ming Dynasty and Qing is connected with social and economic factors. However the incarnation of the idea or model of the capital layout of <Kao Gong Ji> in the real planning of these cities from Chang An in Sui and Tang Dynasties to Beijing city in Ming and Qing Dynasties demonstrates that there has been a continuing development, maturation and perfection of this process. In addition to the layout of the cities, local administration centers have also, to a lessen extend, tried to follow the idea or model of the structure of the central axis in <Kao Gong Ji>. The changes or differences in the natural environment and human conditions have also resulted in a diversification of the morphology of the central axis.

Keywords: Chinese historical cities, the structure of central axis, morphology of central axis, the layout of city, morphology of city